

## 台湾への日本酒のさらなる輸出拡大の可能性

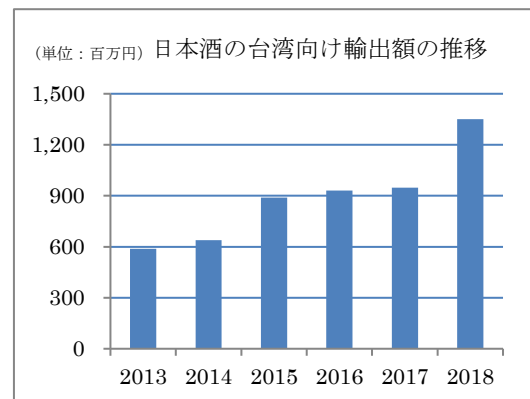
公益財団法人日本台湾交流協会台北事務所（研修生） 安永 正念

### 1. 食品関係の関税率引き下げについて

2019年7月3日に税関輸入税則の部分税則改正案が立法院で可決され、農水産品と加工食品に関して15品目<sup>1</sup>の輸入関税率の引き下げが決まり、同26日から施行された。「環太平洋戦略的経済連携協定（TPP）への積極的な加入に向けた貿易自由化の段階的推進」が改正目的とされているが、関税が引き下げられた品目は、日本からの輸入額が多い品目が多数を占め、特に日本酒は40%から20%へと引き下げられた。

### 2. 台湾への日本酒の輸出について

財務省貿易統計によると、2018年の日本から台湾への清酒の輸出は、金額ベースで第5位、数量ベースで第4位であった。さらに2013年から6年連続で過去最高額を記録しており（図1）、台湾は2,300万人の比較的小さい市場でありながらも、既に日本酒が浸透していると言える。また、2018年の日本酒の輸出額約13.5億円は、酒類全体の輸出額約59.1億円の中で最も大きく<sup>2</sup>、そのうち福岡（博多港・門司港・福岡空港）からの輸出額は約3.9億円と、全体の約30%を占めている。



（図1）財務省貿易統計を基に筆者作成

### 3. 台湾における日本酒の流通およびトレンド

現在、日本から輸入された日本酒は、日本食レストランで扱われているほか、関税の影響もあって高価なことから、日本酒専門店や高級スーパーなどで、主に贈答用で販売されている。一方で、台湾菸酒股份有限公司（TTL）が製造する台

<sup>1</sup> 穀類原酒、ししゃも（冷凍）、未燻製のカニ（冷凍）、ホタテ（活、生鮮、冷蔵）、未燻製のホタテ（冷凍）、未燻製のホタテ（乾燥、塩漬け、塩水漬け）、未燻製のイカ（冷凍）、未燻製のタコ（冷凍）、長芋（生鮮、冷蔵）、温州みかん（生鮮、乾燥）、練り製品、みそ、マヨネーズ・サラダドレッシング、カレー、固形・粉末状の肉類スープ・ブロスおよびその調製品

<sup>2</sup> 日本酒約13.5億円、ビール約13.4億円、ウイスキー約13億、ぶどう酒約0.8億円、焼酎約0.7億円など

湾の蓬莱米を使用した「玉泉」や、現地代理店と共同製造されている「月桂冠」など、台湾で現地生産された日本酒は、一般的なスーパーやコンビニエンスストアで安価で手軽に購入することができる（写真1）。これらの日本酒は、甘口で酸味が少なく飲みやすく、温度管理も必要ないため、「熱炒」と呼ばれる台湾式居酒屋などで提供され、台湾社会で日本酒の代表的存在となっている。

台湾では、「台北国際酒展・純米展」など酒関連イベントも数多く開催され、日本酒の蔵元や輸出・輸入業者も数多く出展している。20～30代の来場者が多く目立ち、台湾の輸入業者による日本酒講座（日本酒の醸造過程や保存方法などを紹介）が満員となるなど、台湾人にとって日本酒に対する関心は高まっている。

また、台湾には「国際唎酒師（ききさけし）」が551名<sup>3</sup>おり、日本以外では香港、韓国に次ぐ人数となっている。台湾での日本酒人気は、このような唎酒師の影響も大きく、日本酒だけでなく、それに合った酒器も一緒に販売するなど、日本文化として伝えている店も存在する。

#### 4 今後の輸出拡大の可能性

台湾における日本酒市場は成熟していると言えるが、一般的な生活で「日本産の日本酒」に出会う機会は依然として少なく、日本酒の飲み方や味わい方を知らない台湾人も多い。今回の関税引き下げについて、台湾の輸入業者からは「日本酒の輸入量が増加し、日本酒市場が拡大する」との声も多く、価格が下がった日本酒の流通が増えることで、台湾人の一般生活の中に、日本酒がより一層浸透することが期待される。このため、試飲会などを通して、日本酒の魅力を直接消費者に訴求する取組みなどは、今後の営業活動の有益な選択肢になると考えられる。さらに、台湾は訪日旅行のリピーターが多く、日本文化への造詣が深い人も多いため、単に日本酒を販売するだけでなく、酒器などの日本文化と合わせてPRすることも一案と考えられる。

今後も、県産日本酒の販路拡大のため、関税引き下げの影響について情報収集を行うとともに、日本酒市場の現地ニーズの把握に努め、継続して情報提供を行っていきたい。



（写真1）コンビニの酒類販売コーナー  
※上段：高粱酒、中・下段：輸入ワイン  
※赤枠は玉泉と月桂冠。

<sup>3</sup> SSI インターナショナルが認定する資格で、認定時の居住地での登録者数（2019年8月現在）。